

港区におけるコミュニティ施設配置に関する研究

日大生産工（院）○山本 香織 日大生産工 浅野 平八

1. 研究の目的と方法

各地域にはそれぞれ、地域住民が集まる施設が存在する。現在、東京都 23 区内をみると、練馬区に唯一「公民館」があるのみで、その他の施設は「区民センター」や「コミュニティセンター」という名称で存在する。それらはまったく同一の施設像とは断定できないが、都市住民のコミュニケーションの場となっていることには変わりはない。しかしながら、都心に近くなればなるほど、地域間のコミュニティ形成は希薄になり、それらを誘発する施設の存在も見えにくい。地方都市とは違い、昼夜の人口差が大きく、昼間と夜間で街の顔が違う事も都心区の特徴のひとつである。そこで、都心におけるコミュニティ形成を誘発する施設を探索することが本研究の目的である。

調査対象地域は、東京都港区とする。選考理由として、港区は都内都心3区のひとつであり、在勤者と在住者が共に存在することから対象区として選んだ。本稿では、港区の中でも比較的新しい街であり、コミュニティ活性化に力を入れている芝浦港南地区に焦点を当てる。

2. 地区計画と既存コミュニティ施設配置

1947 年 3 月、都は区の自治権強化と戦後復興を目的として区域の再編成を実施した。

これにより、旧赤坂区・旧麻布区・旧芝区の3区（計 207 町）が統合され、新しく港区が誕

生した。現在、港区は「芝」「麻布」「赤坂」「高輪」「芝浦港南」と 5 つの地区に分けられており、平成 18 年 4 月の「区役所・支所改革」実施後、それぞれに総合支所を持ち、各地区住民の生活の窓口となっている。

図1は港区全体の基盤となる公共施設をプロットしたものである。

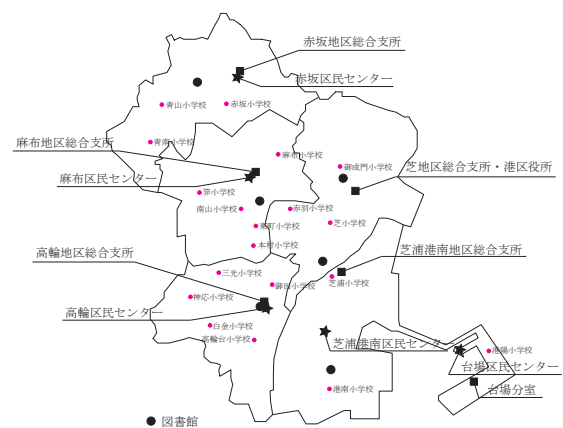


図1 港区内5地区別公共施設配置

その施設数を表1にまとめた。それらを見てわかるように、5地区には小学校・児童館・福祉会館・図書館がほぼ均等に配置されている。

一地区内で見ても、対象者が世代別の施設が個別に存在しているため、それぞれの施設利用者が交流し合う機会はほぼない。

各施設を訪れる人たちの利用目的がはっきりとしているため、グループや世代を超えてのコミュニケーション形成は望めない。既存の施設は空間の提供が主体であり、グループごとの利用が中心である。

表 1 港区 5 地区別公共施設数

	総合支所	小学校	児童館	福祉会館	図書館
芝	1	3	2	5	2
芝浦港南	1	3	3	1	1
高輪	1	5	4	4	1
赤坂	1	3	2	3	1
麻布	1	5	2	5	1

表 2 5 地区別施設名称一覧

芝	芝地区総合支所	赤羽小学校	芝公園児童館	三田福祉会館	みなと図書館
	港区役所	芝小学校	新橋児童館	愛宕福祉会館	三田図書館
		御成門小学校		新橋福祉会館	
				虎ノ門健康福祉会館	
芝浦港南				芝公園福祉会館	
	芝浦港南地区総合支所	港南小学校	港南子ども中高生プラザ	港南健康福祉会館	港南図書館
		芝浦小学校	芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ		
		港陽小学校	台場児童館		
高輪	高輪地区総合支所	神応小学校	白金台児童館	白金台福祉会館	高輪図書館
		三光小学校	朝日児童館	高輪福祉会館	
		白金小学校	豊岡児童館	豊岡福祉会館	
		高輪台小学校	高輪児童館	白金福祉会館	
		御田小学校			
赤坂	赤坂総合支所	赤坂小学校	青山児童館	赤坂福祉会館	赤坂図書館
		青山小学校	赤坂子ども中高生プラザ	青山福祉会館	
		青南小学校		青南福祉会館	
麻布	麻布地区総合支所	麻布小学校	飯倉児童館	西麻布福祉会館	麻布図書館
		南山小学校	西麻布児童館	飯倉福祉会館	
		本村小学校		本村福祉会館	
		筈小学校		麻布福祉会館	
		東町小学校		南麻布福祉会館	

3. 芝浦 CANAL CAFÉ の誕生

3.1 芝浦港南地区概要

港区の南東部に位置し、東京湾に面する芝浦港南地区は、埋め立てによりできた。

地区内には複数の運河が走り、それにより地域が細かく隔てられている。総面積は約 4.76 km²で、港区全体の 23.4%を占め、5 地区の中では最も広い地区である。

近年の相次ぐ大規模マンション建設等により人口が急増しており、平成 21 年 1 月 1 日現在の人口は平成 15 年度と比較すると約 2 倍に増加している。

世代別にみると、年少人口（0～14 歳）の割合は、港区全体で 10.9%、芝浦港南地区は 13.7%である。同じように生産年齢人口（15～64 歳）は区全体で 71.6%、この地区では 75.1%、

老年人口（65 歳～）は区全体で 17.5%、この地区では 11.2%となる。このように区全体と比較すると、老年人口は下回っているのに対し、年少人口と生産年齢人口の割合は上回っている。そこで、このデータから、新しくこの地区に移り住んでいる世帯（ファミリー層）が多い事が予想できる。実際、平成 20 年の世論調査によると、芝浦港南地区では居住期間が 3 年未満の世帯が 47.3%を占め、区全体と比べて居住期間の短い人が多い事がわかった。この結果から、近年の新しいマンション供給に伴い、新たに移り住んできた世帯の増加が伺える。

つまり、芝浦港南地区では、それらの新住民と、古くからそこに住む旧住民との地域間コミュニケーション形成が重要な課題である。

そういった背景を持ちながら、2009年6月、芝浦港南地区の新芝運河沿いにコミュニティスポット「CANAL CAFE」がオープンした。

平成16年度に東京の「運河ルネッサンス」の対象地域に指定されたことにより、地域活性化に活用する際の水際規制が緩和された。さらに、平成17年には、港区の「商店街変身戦略プログラム事業」の指定も受けたことにより、芝浦商店会の人と区が話し合い、5年間の月日をかけてオープンした。運河のある街芝浦で、その地域資源を活かして地域のにぎわいをつくり出す、つまりコミュニティ形成を誘発することを目的としている。

4. 芝浦 CANAL CAFÉ の調査

4.1 調査概要

2009年10月13日～18日の土日を含む計6日間の営業時間中17時から21時まで、①観察調査、及び②ヒアリング調査をおこなった。

①観察調査

芝浦 CANAL CAFÉ の利用者とその行動、利用者間のコミュニケーションなど様々な事象を観察し以下にまとめる。

軽自動車を改造し、日本初のモバイル（移動型）コミュニティスポットとしてオープンした CANAL CAFÉ は運河沿いに停車し、その周りにイスとテーブルを並べた屋外カフェとなっている。営業は毎日17時から21時で、ビールや地酒等のアルコール類と簡単なおつまみを提供している。車内に水道はなく、水はペットボトルにためて使用。電子レンジ、冷蔵庫、ビールサーバーを装備して簡単な調理をおこなっている。6日間の利用者の属性を時間帯ごとにまとめた。（表3）一組あたりの滞在時間は10分～2時間と幅広いが、6日間の調査で37組の平均をとると、69分という結果となった。

表3を見てもわかるように、平日は会社帰りの通勤客が多く、土日は地域住民でにぎわっていた。男女比は男性の方が比較的多いが、男女とも1人で訪れる人がいた。運河を自家用の船に乗って来る地元の人や、犬を連れて来る人も多く、この場所ならではの光景を目にすることができた。天候に左右される、飲酒がメインだと子どもだけでの利用ができない、顔見知りの住民だけでにぎわっていると新住民が入りづ

表3 芝浦 CANAL CAFÉ 客層観察調査表

	10月13日(火)	10月14日(水)	10月15日(木)	10月16日(金)	10月17日(土)	10月18日(日)
従業員数						
17時	客無し	通勤者(男2)	客無し	地域住民(男2)	地元の親子連れ	地域住民(男1女1)
:10				地域住民(男2)	地域住民(男4)	地域住民(男1女1)
:20				地域住民(女2)	地域住民(男1女2)	
:30				地域住民(男1女1)		地域住民(男1女1犬)
:40		地域住民(女1)				
:50		通勤者(男2)				
18時	客無し		通勤者(男1) 通勤者(男2女1)	通勤者(男1)		地域住民(女2犬) 地域住民(女1)
:10						
:20						
:30						
:40			地域住民(男2)			
:50			通勤者(男6)	通勤者(男2)		地域住民(男2)
19時	地元の親子連れ	通勤者(男2) 通勤者(男1女1)	通勤者(男5) 通勤者(男3)	通勤者(男1) 地域住民(男1女1)	雨のため調査中止	地域住民(男1) 地域住民(男1女1犬) 地域住民(女1)
:10						
:20						
:30						
:40						
:50						
20時	地域住民(男4)					地域住民(男1女1) 通勤者(女4) 地域住民(男2女1)
:10						
:20						
:30						
:40				通勤者(男3女1)		
:50						

らいなどが欠点として挙げられるが、通勤者は帰宅のために通り過ぎ、住民は犬の散歩のために通り過ぎるただの道であった運河沿いに、このようなスポットが出来た事は、人々が立ち止まるきっかけとなった。通りすがりに知り合いを見つけてそのまま一緒に飲み始める光景も多く見られた。施設とは違い、そこに滞在する人たちの活動が見える事によって人が人を呼ぶ、街頭生活の可視化からコミュニケーションが生まれていた。このカフェが屋外にできたことは、運河沿いという地域の公共空間を活性化していく装置となり、既存のコミュニティ施設でも居酒屋でも見られない、連れた犬を介してコミュニケーションが生まれるなどという特徴的な場所をつくりだしている。

②ヒアリング調査

芝浦商店会会長・CANAL CAFE 責任者の方にヒアリングした内容を以下にまとめる。

【店舗形態に関して】

- ・移動型といっても毎日違う場所に出向くわけではなく、定位置で店を開き閉店後はすべて片付ける。昼間は近くの駐車場へ止めておく。
- ・固定の店舗でやりたかったが許可が降りずこのような形態でやることになった。
- ・公共の場であることから、歩行者の通行の妨げにならないようにイスとテーブルの個数制限がある。
- ・屋外という立地から犬連れ、小さな子ども連れが増えてきた。

【運営に関して】

- ・統括は芝浦商店会。有志店舗は4～5店舗。
- ・実際に店に立つ人たちは時給制で働く。
- ・常連客も増え、旧住民の支えがあってこそ成り立っている。
- ・少子化で統合した小学校から余って使用しなくなった給食皿を寄付してもらい再利用したり、防寒のための無煙廃油ストーブには商店会

の店から廃油をもらって可動するなど、カフェを超えた活動を繰り返し広げていくなかで、地域との関わりを持ち、地域住民の交流機会を広めていく事につながっている。

- ・今後持続していくために、人の集まりが重要な課題である。
- ・昼間の営業も検討している。

5. まとめ

コミュニティ形成のためには、①施設が存在して住民の活動が生まれる場合と、②活動が発足してその器としての施設需要が生まれる場合との2つのプロセスがある。本稿において、地域資源である運河を活かしてコミュニティ形成をはかることで、運河自体のにぎわいをもつくりだそう、というビジョンを持って結束した芝浦商店会の人たちによる CANAL CAFE の事例は、後者である。

都心の特徴と立地の特性を最大限に活かしてコミュニティ形成を誘発する可視的な装置の設置によって人を集め、コミュニケーションの場となっていることがわかった。そこで生まれた活動がコミュニティ施設の需要を高めることにつながることを推察された。



写真 1
CANAL
CAFE
2009.10.14

参考文献

- 1) 久田邦明,「各地に広がるコミュニティ・カフェ」社団法人全国公民館連合会(第556号),月刊公民館,2003.09.01,p.28-29
- 2) 港区芝浦港南地区総合支所協働推進課,港区基本計画
芝浦港南地区版計画書,平成21年度～平成26年度
- 3) 久田邦明,「コミュニティカフェの可能性」,月刊社会教育
編集委員会,月刊社会教育,no.584,2004.06.01,p.37-43
- 4) 佐藤健二他,都市社会学のフロンティア1 構造・空間・方法,
日本評論社,1992,02.10